

# 主 論 文 要 旨

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	北 沢 桃 子
<b>主 論 文 題 名</b> 眼部等の画像解析技術を用いた気分障害評価法の開発および気分障害と眼疾患についての関連の検討 (The Development of an Evaluation Method for Mood Disorders through Facial Image Analysis and the Investigation of Relationship between Mood Disorders and Eye Disease)				
<b>(内容の要旨)</b> 現在、多くの医学領域で疾患の重症度評価は、血液学的所見や画像所見などの客観的、定量的な指標を用いて行われている。しかし精神科領域においては、診断や、症状の重症度を反映する生物学的指標に乏しい。従来精神科診療においては、重症度の評価に種々の評価尺度が使用されてきた。これらの評価尺度は面接を通じて、患者の主観的体験や面接者の観察から評点されるが、明確な判断基準に乏しい、評価者がバイアスを受けやすい等の点から、客観性に乏しいという問題がある。さらに、これらの症状評価面接には時間をかけた面接が必要なため、臨床現場での利用のハードルにもなっていた。 一方で精神科領域においては、古くから症状の中心を、患者の自覚症状や、他者によって観察可能な気分の変化、思考の変化と捕らえてきた。例えばうつ病患者は、表情が暗くなり、声は弱々しく、イントネーションが平板化する。思考は緩慢になり、応答に時間がかかり、発言内容は悲観的なものとなる。これらの変化は、曖昧で定量性に乏しいものの、明らかな変化として評価者に印象付けられることが多い。 まず、本論文では、このような従来は定量化し得なかった患者の思考、表情、発言内容を情報通信技術 (Information and Communication Technology: ICT) を用いて可視化し、臨床評価や治療に活用するためのプロジェクト (国立研究開発法人日本医療研究開発機構: Japan Agency for Medical Research and Development: AMED) の未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業「表情・音声・日常生活活動の定量化から精神症状の客観的評価をリアルタイムで届けるデバイスの開発」研究代表者・岸本泰士郎) の中から、瞬目・表情の定量化による気分障害の客観的重症度評価に焦点を当て、定量化技術の開発、妥当性検証および症状評価試験についての研究成果を報告した。 続いて、気分障害とドライアイの関連について報告した。上記の研究において瞬目や表情の定量化による気分障害の客観的評価方法の開発にもつばら従事してきたが、気分の状態を捉える一つの指標として瞬目という要素に着目するとき、眼疾患と気分障害との関連を考慮することは重要であると考え、代表的な眼疾患の一つとしてドライアイに着目した。ドライアイと気分障害との関連についてはいくつかの先行研究があり、トピックの一つとして取り上げられているが、これらに関する縦断的研究はまだない。そこで我々はうつ病および不安障害とドライアイの関連を明らかにすることを目的に自然観察研究を行い、本論文にその結果を報告した。				